

小栗街道（熊野街道）にみる《おぐり判官》・ 《信田妻》関連の「史跡」とその生成 —和泉国信太郷を中心として—

Historic Sites Related to “Oguri Hangan” and “Shinodazuma” on the Oguri Road (Kumano Pilgrim’s Progress) and Their Formation

— Centered on Shinta-go, Izumi-no-kuni —

吉村 旭輝¹

¹和歌山大学紀伊半島価値共創基幹 紀州経済史文化史研究所

熊野街道（小栗街道）は「聖地」熊野三山へとつづく参詣道である。この地には信仰にもとづく寺社はもとより、人形浄瑠璃や歌舞伎などの芸能の流行によって形成された「史跡」も存在している。こうした「史跡」は、いつ、どのようにして形成されていったのであろうか。ここでは、参詣道の旧和泉国にあたる小栗街道を舞台とする説経節《おぐり判官》また和泉国信太郷の信太明神（現・聖神社）の縁起譚とする《信田妻》を中心として同地の芸能の流行によって形成された「史跡」とその生成過程を考えてみたい。

キーワード：説経節，人形浄瑠璃，信太明神（聖神社），おぐり判官，信田妻，だんじり（地車）

はじめに

京都から熊野三山にいたる熊野参詣道（熊野古道）は、大阪では小栗街道（熊野街道）と呼ばれる。この小栗街道は、現代に至るまで、中世以来の熊野三山を目的地とする参詣だけでなく、近世以降の伊勢への御蔭参りの帰路や西国順礼など、さまざまな目的でさまざまな人びとが往来してきた。そのなかで、泉州路は「熊野」を冠することなく、とくに「小栗街道」と呼ばれている。この名称は説経節《おぐり判官》が元になっている。またこの小栗街道にはその名とおおり、《おぐり判官》にちなんで「史跡」が各所に存在している。このような「史跡」は旧紀伊国も含む熊野参詣道全体に分布している。

ここではこの街道の聖神社周辺（和泉市）に存在する《おぐり判官》や同社の縁起譚とも考えられる説経節《信田妻》の「史跡」に注目し、それらが形成された時期とその題材になった語り物の近世での変容過程をとおして、「史跡」の生成にみる「聖地の創出」の一端を明らかにしたい。

1. 説経節と五説経

1.1 説教とその担い手

説経節は江戸時代前期に流行した語り物である。寺院等での經典講義を高座で行なう唱導説法が巷間に広

がったもので、スリザサラを鳴らしながら語る「さゝら説経」といった説経語りの太夫によって寺社の境内や辻々で行なわれてきたことは、徳田和夫や山路興造などの研究によって明らかにされている^[1]。とくに山路は「さゝら」つまりスリザサラを「社会組織の外に置かれた、人に非ざる者の身分を象徴するものと見られていたのではないか」としており、その背景には中世の史料に登場する「さゝら」を持った人びとの姿から容易に推定ができるとしている。また山路は「さゝら」の初出である鎌倉時代中期に成立したとされる『撰集抄』巻五第十三「津州小屋道路遁世者事」に記された念仏聖、鎌倉時代後期の『天狗草子絵巻』伝三井寺本巻の一に描かれた「さゝら」を持った自然居士、そして1294年（永仁2）の『溪嵐拾葉集』巻九「禅宗教家同異事」に記された禅僧の自然居士（サレラ太良）が天台の僧によって京中を追放されたという記事から、「さゝら説経の原型が、その語りの内容こそ違え、鎌倉時代後期に「異類異形」として旧仏教から弾圧された宗教者のなかにあった」としている（山路，1990）^[2]。このように説経節の担い手の中心であったのが下級宗教者であったことがこれまでの研究で指摘されてきた。

しかし室町時代には、スリザサラは『洛中洛外図屏風』歴博甲本などにもみられるように風流踊りの側踊りなどにも取り入れられ、楽器としてさまざまな芸能

で使用されるようになっていく^[3]。また自然居士などスリザサラを使用する放下僧も輪鼓や品玉といった曲芸を取り入れて、それが表芸となっていく。このころには「さゝら」は下級宗教者を象徴するものではなく、合いの手の道具として使用されるようになっていった。またさまざまな下級宗教者によって社寺の縁起譚を語る勸進活動を中心に室町時代後期に顕在化していったのが寺社の縁起譚と結びついた説経節であった。

これら説経節を語る説教者たちは東海道の山城国と近江国の国境にあたる逢坂山の蟬丸宮（現・関蟬丸神社）を根拠地としていた^[4]。この場所は、説経節のなかでも登場しており、説経節《おぐり判官》では、照手が餓鬼阿弥（小栗）を乗せた土車を曳く場面での目的地にもなっている。またこの地は盲人の蟬丸が開眼した逸話と関連し、琵琶法師も根拠地としている。こうした所以から1656年（明暦2）以降、蟬丸宮祭礼には美濃国・尾張国・三河国・備前国・美作国・讃岐国の説教者が参加するようになる。さらに江戸時代後期には蟬丸宮と三井寺が認めた「説教讃語座」による説教興行権の独占が多くの先行研究によって指摘されている^[5]。

1.2 五説経と縁起譚

説経節はそれぞれの説経にちなんだ寺社やそこに祀られ、信仰の対象となっている神仏の霊験譚を語ることが中心であったが、その霊験による功德などよりも物語性を強調させていく。そして江戸時代初期には「五説経」と呼ばれるものが生まれていく。それが《さんせう太夫》（丹後国金焼地蔵縁起譚）、《かるかや》（信濃国善光寺縁起譚）、《しんとく丸》（摂津国四天王寺が舞台）、《おぐり判官》（美濃国安八郡須俣正八幡縁起譚（現墨俣八幡神社））、《梵天国》（仏教説話）である。これらはそのものが仏教説話である《梵天国》をのぞき、それぞれに寺社の縁起譚や関連する寺社が舞台となっており、それらを括弧で記した^[6]。

また、紀伊国高野山にも菴堂が存在しており、ここでも現在は《かるかや》の絵解きが行なわれている。さらに《おぐり判官》も相模国遊行寺との関連も考えられるため、特定の寺社のみの説教者が用いたものではないことが考えられよう。なお、享保期（1716-36）以降に五説経に加えられたものも存在しており、それが《あいごの若》（近江国山王権現（現・日吉大社）縁起譚）、《信田妻》（和泉国信太明神（現・聖神社）が舞台）、《梅若》（仮名草子『すみだ川』が元）である^[7]。

これらは江戸時代初期に古浄瑠璃と結びつき、説経浄瑠璃として成立する。こうして成立した説経浄瑠璃

は江戸時代中期になると改変され、《おぐり判官》は「小栗判官車街道」、《かるかや》は「菴桑門筑紫轢」、《信田妻》は「芦屋道満大内鑑」、《しんとく丸》は「摂州合邦辻」といった人形浄瑠璃の人気作も誕生する。ここではとくに小栗街道と関係する《おぐり判官》と《信田妻》に注目したい。

2. 《おぐり判官》

2.1 《おぐり判官》の変遷

説経節《おぐり判官》は美濃国安八郡須俣正八幡の縁起譚であったことは先に述べているが、同社の縁起譚であるとは必ずしもいえない。物語のなかでは「藤沢上人」が登場し、閻魔大王からの書状を受け取り、餓鬼阿弥と化した小栗を湯の峰へとむかう土車を用意する場面がある。この藤沢の遊行上人は藤沢の時宗の総本山遊行寺の僧侶のことで、同寺の塔頭のひとつである長生院には「小栗判官・照手姫の墓」が存在している。また同院では、この墓の建立に関する由緒を現在でも語っており、その内容を要約すると、1422年（応永29）常陸小栗の城主、満重が足利持氏に攻められて落城、その子助重が、家臣11人と三河に逃げのびる途中、藤沢で横山太郎に毒殺されかける。このとき横山の娘照手が助重らを逃がし、遊行上人に助けられた。のちに助重は家名を再興し、照手を妻に迎えた。満重の死後、助重は遊行寺八徳池のそばに満重主従の墳墓を建立し、助重の死後、照手は髪を落とし長生尼と名乗って、助重と家臣11人の墓を守り、余生を長生院で過ごしたというものである^[8]。

この由緒は同院のホームページに記されているもので、《おぐり判官》の原典とされる伝岩佐又兵衛画・御物絵巻『をぐり』とは、小栗の名前や年代などがより具体的になっている。また内容も異なり、遊行寺長生院が江戸時代に発行した「小栗略縁起類」をさらに変形させたものとなっており、江戸時代から同院の縁起譚として語られてきたことが考えられる^[9]。このように、《おぐり判官》がさまざまな寺社が縁起譚として利用してきたことが考えられるのである。

また《おぐり判官》の成立過程やその後では、物語がそれぞれの寺社の縁起として、また舞台芸能の演出によって大きく改変されていった。これらの変遷過程はすでに文教大学小栗判官共同研究チーム編（2007）にまとめられており、ここでは具体的には取りあげない^[10]。ただし、それらの違いを明示するために物語の骨子とともにその違いをまとめて紹介してみたい。

2.1.1 『鎌倉大草紙』

《おぐり判官》の原型にあたるのが史書として室町時代前期の鎌倉御所足利氏を中心に関東の動静を記した『鎌倉大草紙』である^[11]。同書は作者が不詳であり、戦国時代に成立したと考えられている。また同書では1379年（康暦元）の足利満氏の乱から1479年（文明11）までが記されており、小栗関連の原型とされる記載は上巻にあたる1411年（応永18）以降の上杉禅秀の乱を記した場面からである。その骨子を記しておく。

常陸国（現茨城県真壁郡協和町）に、小栗氏が城を構えていた。1415年（応永22）、関東で上杉禅秀が乱を起こした際、小栗氏は上杉方に味方し、足利持氏に敗れ、城主であった小栗満重とその子助重（判官）は、小栗一族の住む三河国を目指して逃れようとした。相模国に潜伏していたとき、権現堂にて盗賊に毒を盛られた。その際遊女であった照姫に救われ、荒馬で藤沢に逃れ、遊行上人に助けられ、その後助重は三河国に送られた。

この内容は前半部の小栗城落城までが史実として記されている。史料が比較的少ない乱の内容を把握するための史料として重要視され、多くの中世史研究でも引用がみられる。

また、後半の小栗逃亡劇については平野雅道が検討をし、その末尾に永享年間（1429-41）までのことが記されており、その内容が不自然なことから「小栗城落城の後、永享年間以降に語られた話を、挿入したと考えるのが妥当」として、「作者の物語の演出」であろうと結論づけている（平野、2007）^[12]。

このように『鎌倉大草紙』では史実と演出が混在した物語となっており、これがのちの《おぐり判官》へと発展していくのである。

2.1.2 伝岩佐又兵衛画・御物絵巻『をぐり』

つぎに江戸時代初期（1650年以前）に成立したときれ、宮内庁が所蔵する伝岩佐又兵衛画・御物絵巻『をぐり』をみていきたい^[13]。

鞍馬の毘沙門天の申し子であり、二条大納言兼家の嫡子小栗判官は鞍馬からの帰路、菩薩池の美女に化けた大蛇を妻とする。大蛇は懐妊し、子が生まれることを恐れた神泉苑の龍女と大蛇が格闘する。そのため7日間も暴風雨がおこり、小栗は罪を着せられ常陸国に流罪となる。常陸国に流罪となった小栗は武蔵・相模の郡代横山の娘である

照手の美貌の噂を行商人から聞き、照手姫に文を出す。照手姫から返事を受け取るや、小栗は10人の家来とともに、照手姫のもとに強引に婿入りをする。怒った横山が、小栗と家来達を館に招き毒殺をする。小栗は上野原で土葬、家来は火葬となった。照手は相模川に流罪となったところ、村君太夫に命を救われる。その後、人買いに売り飛ばされる。美濃国青墓の万屋でこき使われることとなった。

一方、小栗と家来は閻魔大王の裁きにより土葬された小栗だけが現世に戻されることとなる。小栗は「熊野の湯に入れば元の姿に戻ることができる」との藤沢の遊行上人宛の手紙とともに餓鬼阿弥の姿で現世に戻された小栗は自身の墓から現われ、それを見た遊行上人は手紙を読む。遊行上人は餓鬼阿弥を土車に乗せ、胸の木札に「この車を引くものは供養になるべし」と書く。その後餓鬼阿弥を乗せた土車は多くの人によって曳かれ、美濃国青墓に到着する。青墓では常陸小萩と名を変えて万屋で働いていた照手姫が土車を曳くことを万屋の主人に直訴し、餓鬼阿弥が小栗と知らずに5日間大津の逢坂山まで車を曳く。その後も多くの人によって土車は曳かれ、ついに熊野に到着する。餓鬼阿弥は湯の峰温泉の薬効にて49日の湯治の末、業病は完治、元の小栗の体に戻る。

小栗は京にもどり、天皇から死からの帰還の珍事を称えられ、常陸・駿河・美濃の国を賜る。また小栗は万屋の常陸小萩を訪ね彼女が照手姫であることを知り、とともに都に上る。

その後、小栗は横山を滅ぼし照手姫とともに暮らすこととなった。小栗の死後、蘇生する英雄として美濃墨俣の正八幡に照手姫と共に祀られた。

この物語は『鎌倉大草紙』と違い、そもそも上杉禅秀の乱などといった歴史的事象との関連はなく、完全な創作と化している。それは前半の小栗の出自や大蛇との婚姻などからも明らかで、とくに後半部には小栗の逃亡劇等『鎌倉大草紙』から題材はとっているものの、三河国ではなく、紀伊国熊野湯の峰へと展開をみせている。

この物語は説経節《おぐり判官》の正本として有名となったもので、本文冒頭に「そもそも、この物語の由来を、詳しく尋ねるに、国を申さば、美濃の国、安八の郡、墨俣、垂井、おなことの神体は、正八幡なり。荒人神の御本地を、くわしく説きたてひろめ申すに、これも一とせは、人間にてや、わたらせたまう。」とある

ことから、美濃国安八郡須俣正八幡の縁起譚となっている^[14]。のちに創作されていく人形浄瑠璃などの原典となり、説経節として、また説経浄瑠璃としてこの『をぐり』が説経語りの太夫のような下級宗教者によって語られていたと考えられる。

2.1.3 遊行寺長生院発行の「小栗略縁起類」

こうした縁起譚として考えられる《おぐり判官》はほかにも存在する。それが先に触れた遊行寺の塔頭にあたる長生院が発行した「小栗小伝」や「小栗略縁起」などの「小栗略縁起類」である。これらは紙宏之が「小栗略縁起類」と題し、その成立過程を考察している。

略縁起とは江戸時代の元禄期（1688-704）以降の寺社参詣が盛んになったころに各寺社や門前で売られていたそれぞれの寺社の縁起を一紙や数枚の紙でつづったものである。長生院は別名小栗堂とも呼ばれ、「小栗判官照手姫の墓」が存在していることを紹介し、また同院のホームページの縁起にも触れたが、ここではそのもととなっている略縁起の大略を記しておく^[15]。

常陸國小栗城主であった小栗満重が謀反の噂を立てられ、管領上杉四郎によって落城させられる。満重は一族のいる三河国に逃れようとし、途中相模国藤沢の横山大膳の家に投宿、横山は小栗を殺し大金を得ようと考え、毒酒によって殺されてしまう。

そのころ、藤沢上人の夢に閻魔大王が現れ、小栗を蘇生させ給ことを告げる。藤沢上人は小栗を熊野の湯に浴させ、小栗は蘇生する。また照手は横山の家を脱出するも捕らえられ海に投げられる。観音の利生によって一命をとりとめ、漁夫に助けられるも売り飛ばされて美濃国青墓に流れ着く。

蘇生した小栗は横山を討伐し、照手を探し出して救済する。その後小栗は念仏に帰依し、子供の助重は供養のために閻魔堂を建立する。その横に堂を建てた照手は仏道に帰依し往生を遂げた。そのお堂が長生院である。

この内容はその大半が『をぐり』に依拠している。しかし、前半の部分はより具体性をもたせるためか、敵味方が入れ替わってはいるが、『鎌倉大草紙』に依拠している。また、『大草紙』では判官が助重であるのに対し、ここでは父満重が判官となっている。さらに重要なのが、小栗・照手と長生院のかかわりが最後に記されている点である。このように長生院の縁起譚として須俣正八幡の縁起譚とは違う展開で記されているので

ある。

この「小栗略縁起類」は多数存在しており、紙によって諸本の違いがまとめられており、それぞれの違いもすでに把握が進められている^[16]。それらをもとに紙は長生院が略縁起を作成した動機として、以下の点を挙げている（紙、2007）^[17]。

- ① 「物語においては、遊行寺は物語中の一舞台にすぎず、説経などは、美濃の正八幡の本地物となって、遊行寺は置き去りにされている。遊行寺や長生院にとって不本意だったのではないか。」
- ② 「小栗物語が人気を博していた江戸末期においては、小栗ものの流行に便乗し、小栗伝承を引きつけておいたほうが何かと得策だったのではないか。」
- ③ 「芸能・演劇ファン向けにではなく、小栗や照手を崇拜・信仰の対象とする人たちを対象として、特に、照手を救済した観音の霊験を信ずる女性の信者のために、長生院の創建を語る小栗略縁起を創作したのではないか。」
- ④ 「檀家を持たない長生院にとっては新たな信者の獲得は切実な問題でもあったろう。」

この紙が述べているように、江戸時代はさまざまな寺社が浄瑠璃や歌舞伎といった芸能の流行に便乗し、出開帳や居開帳を積極的に行ない、信者と寺社の運営資金の獲得に積極的であったことが考えられる。自身も道成寺物の流行に際しての「史跡」の形成と同様のごとは述べてはいるが、この《おぐり判官》の「利用」は全国的に展開しているといえよう^[18]。

2.1.4 人形浄瑠璃での展開

— 「当流小栗判官」・「小栗判官車街道」 —

こうした全国的な《おぐり判官》の「利用」の根源には演劇での同作の流行にある。とくに人形浄瑠璃では近松門左衛門が1698年（元禄11）竹本座初演で、人形浄瑠璃「当流小栗判官」を制作したことがその端緒となる^[19]。同作では『をぐり』と違い、毒を盛られた小栗が地獄に行くことはなく、餓鬼阿弥となった小栗が藤沢にとどまり、湯汲車のみが湯の峰に行くというストーリーである^[20]。

また、1738年（元文3）には、竹本座初演で、竹田出雲、文耕堂の作である、人形浄瑠璃「小栗判官車街道」が制作される^[21]。この物語では、照天（照手）が美濃国から小栗助重とともに熊野まで片輪車を曳くといった展開がみられる^[22]。

このように、人形浄瑠璃では《おぐり判官》をアレンジし、全く新たな展開がみられるようになる。こう

した展開は長生院での略縁起だけでなく、近年では2019年（令和元）に梅原猛原作のスーパー歌舞伎II「新版 オグリ」が新橋演舞場で好評を博すなど、枚挙に暇がない。こうした展開は現代でいうところのドラマやアニメーションと同様に「聖地」を生みつけ、時を経て由緒がわからなくなった「史跡」を各所に残すことになっていったと考えられる。

3. 信太郷に残る説経浄瑠璃関連の「史跡」

《おぐり判官》の人形浄瑠璃がきっかけとなった流行は、全国的な「ゆかりの地」での「史跡」が形成されていく。こうした「史跡」をもつ地域では小栗サミットが毎年場所を変えて行なわれ、その全貌が明らかにされつつある。

小栗が土車に乗って曳行された熊野参詣道では、その紀伊路の大阪にあたる街道が小栗街道と呼ばれており、小栗橋などといった《おぐり判官》まつわる「史跡」が形成されている。また、和歌山県の熊野参詣道でも同様で、田辺市上萬呂の熊野橋は別名小栗判官車止橋と呼ばれており、上富田町生馬には、小栗があまりにも急峻な谷であったため「一脚ひいては馬の谷、二脚ひいては馬の谷」の救馬溪が存在している^[23]。また、小栗蘇生の地とされる湯の峰温泉にはおぐりが湯治をした「つぼ湯」をはじめとして、土車を最後に埋めた「車塚」、小栗が力試しに用いた「力石」、さらに小栗の髻を括っていた藁を捨てたところに稲が生えた「まかずの稲」といった数々の関連「史跡」が存在している^[24]。とくに「車塚」は「車塚由来」が版本で存在しており、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、三康文化研究所附属三康図書館、そして西尾市岩瀬文庫がそれぞれ所蔵している。この「車塚由来」は石本和可奈が、そこに記された内容と一連の小栗作品との比較を行なっている。そこには、《おぐり判官》の物語が略式で記されており、最後に湯の峰での湯治のようすと先述の湯の峰に存在している「史跡」の解説が入っている。また岩瀬文庫本には作者とおぼしき「湯本屋栄七」という名がみられることから湯の峰温泉の旅籠が江戸時代後期にこうした由来を作成し、熊野への参詣客を戦略的に導いていたことも考えられると石本が示唆している（石本、2016）^[25]。

これら熊野参詣道沿の「史跡」のなかでも、ここでは信太郷（大阪府和泉市北西部）を中心にみていきたい。

大阪府和泉市北西部は、信太郷と江戸時代以前は呼ばれた、太村、上代村、舞村、尾井村、王子村、中村、上村、富秋村、南王子村によって形成されていた郷村である^[26]。この信太郷を縦断しているのが小栗街道で

ある。また信太郷の中心地には和泉国三宮にあたる信太明神（現・聖神社）が存在しており、門前には熊野九十九王子のひとつである篠田王子、またその南の南王子村には平松王子が存在していた。

このように同地には《おぐり判官》ゆかりの小栗街道と信太明神ゆかりの《信田妻》が存在しており、それぞれの「史跡」が混在している。

3.1 《信田妻》と関連する「史跡」

信太明神の縁起譚を説いた説経節《信田妻》は、《おぐり判官》とならぶ五説経（享保期以降）のひとつで「異類婚姻譚」の代表作である。「小栗判官車街道」が初演された4年前の1734年（享保19）に竹本座で初演された「芦屋道満大内鑑」が人気作となっている。この作品は「小栗判官車街道」と同様竹田出雲の作品で、《信田妻》を改作した物語である^[27]。《信田妻》の内容の骨子は次のとおりである^[28]。

村上天皇のころ、撰津国に安倍保名という人が住んでいた。ある日、保名は信太大明神に参詣し、禊のために池のほとりに立っていると、狩人に追われ傷ついた狐が逃げてきた。保名は、狐をかくまい、逃がすことにする。保名は追ってきた狩人たちに責められ、深い傷を負ってしまう。傷で苦しむ保名のもとへ、若い女が訪ねてくる。女は、名を葛の葉といい、保名の傷の手当をした。やがて保名の傷も治り、2人がともに暮らすうちに、童子をもうける。

保名と葛の葉、そして童子が暮らし、6年がたったある秋の日、葛の葉は、庭に咲いた美しい菊に心をうばわれ、自分の正体が狐であることを忘れ、尻尾をだしていた。童子にその正体を見られた葛の葉は、ともに暮らすのもこれまでと、

恋しくば 尋ね来てみよ 和泉なる

信太の森の うらみ葛の葉

という和歌を残して信太の森へと去っていく。

保名と童子は、母を求めて信太の森にむかう。森の奥深くで保名が振り向くと、一尾の狐が涙を流してじっと2人を見つめていた。保名は狐に対し、「おう道理なり。いかにそれなるは、童子が母にて候な。その姿にては、童子も、恐れをなす。ありし昔の姿にて、若を慰めたび給へ。」と願うと、狐は傍らの池に自分の姿を映し、葛の葉の姿となる。葛の葉は「さればこの若、十歳はさておき、一期

添ひ果てたく候へども、みづからが、身の上は、人間に交はり、一度棲処へ帰りては、また同じ家へ、立ち戻り、住むといふこと、かなはず。名残は、尽きぬことなれど、はやとく帰らせ給ふべし。さりながらこの若、世の常の人体ならず。成人のその後、人を助け、世を導き、天下に一人の、者となり候はん。いでこの若に、形見を取らせ申すべし。」と、形見に白い玉と箱を与え、再び狐の姿となつて森の奥へと消えていく。

この童子は、やがて成人し陰陽道の始祖・天文博士に任じられた安倍晴明となる。

これが《信田妻》の骨子であるが、この物語を改変した「芦屋道満大内鑑」では、とくに四段目の前半部である「狐(子)別れの段」と「蘭菊の段」が人気を博した。この物語は人形浄瑠璃や歌舞伎はもちろん、同地の信太山の盆踊りや瞽女など多くの芸能でも取り上げられ、現在でも切狂言として数多く演じられており、さまざまな研究が進められている^[29]。

信太郷には舞村が存在している。同村は、信太明神の舞太夫村にあたり、土御門家(安倍家)の裁許状(「右京」の許状)をもち、陰陽家の掟書、神拝次第・

陰陽八卦之法・加持祈祷の秘伝を所持していた藤村家が存在していた。この藤村家出身の藤村義彰によると、土御門家の支配を1683年(天和3)に受け、その免許のもと曆(信太曆)を生産していた。また安倍晴明の子孫とする文書も同家には残されているという(藤村, 2000)^[30]。こうした家が信太明神の舞太夫から派生し、土御門家の免許のもと、曆を売りながらこの物語を語っていたことも考えられる。

この信太郷には数多くの《信田妻》関連の「史跡」が形成されている。そのひとつが信太杜(現葛葉稻荷神社)である。同社は秋里籬島によって1796年(寛政8)に制作された『和泉国名所図会』には次のように記されている^[31]。

信太社 信太郷中村の莊頭森田氏の宅地にあり。信太社より十町許西也。いにしへは、森の封境廣大なり。今は、農家建ならびて、かの居地に方廿間許なる森ありて、草木繁茂し、尋常の叢林なり。稻荷祠あり。奥に白狐祠あり。林中に狐穴多し。

この信太社は信太明神とは別の神社であり、中村(現葛の葉町)の庄屋森田氏の勧請によって江戸時代中期



写真1 聖神社(信太明神)【左上】、写真2 鏡池(信太の森)【右上】
写真3 葛葉稻荷神社(信太社)【左下】、写真4 姿見の井戸(信太社)【右下】

に楠の巨木の傍らに創建された稲荷社だと考えられる。この神社の境内は、さまざまな神社を勧請し、写し霊場と化しているが、そのなかに狐の「姿見の井戸」、「白狐石」、「御霊石」なども存在している。当社は1872年(明治5)には中村の村社格を受けている。本来の信太明神は聖神社、また「信太の森」は同社の社叢にあたる。また狐が姿見をした池は聖神社の北側にある鏡池とされているため、信太社は1734年(享保19)に「芦屋道満大内鑑」が人気作となって以降形成されたと考えられる。また「白狐石」は尾井村(現・尾井町)の旧府神社にも存在している。信太社や旧府神社は信太明神よりもより街道に近い場所に存在しており、人形浄瑠璃の作品が人気となって以降、街道沿に当時の「聖地」として形成され、「史跡」となっていったことが考えられる。

3.2 《おぐり判官》と関連する「史跡」

信太郷の《おぐり判官》と関連する「史跡」は平松王子がある旧南王子村に存在している。そこには「小栗の笠懸松・照手姫の腰掛け石」や小栗が夜通しの道中、この坂にさしかかった時に夜が明けたとされる「明



写真5 小栗の笠懸松・照手姫の腰掛け石【上】
写真6 明けの坂【下】

けの坂」などがある。

そのことは奥田家文書の1831年(天保2)の「明細帳」に詳しい。そこには次のように記されている^[32]。

私村方之儀は、大明神信太郷江鎮護御遷座被為在候時、供奉仕来候者ニ付、倚之往昔ハ御社ト万松院之際ニ居住仕罷在候処、人数追々増栄仕候ニ付、御境内御旅所坂の下どうき原(け)マツと申所江住居を移し罷在候、御神慮不浅して人数亦々増益仕候ニ付、慶長五子年王子村地内御除地三反八畝廿八歩奉頂戴罷在此所江住居仕候、

中世の同村は、信太明神隷属の散所神人が住む村であり、毎年2月10日の弓射の神事で牛皮臺目目的の奉納・箭使を務め、また8月15日の信太明神の祭礼では道造り・神輿の前後に供奉もしていた。

同村内に存在する《おぐり判官》関連の「史跡」である「小栗の笠懸松・照手姫の腰掛け石」は管見の限り江戸時代の奥田家文書等には登場しておらず、早くても江戸時代以降に成立したのと考えられる^[33]。この「史跡」がある場所は、同村で一番大きな辻がある小栗街道沿いの場所で、江戸時代は高札場でもあった。この場所は街道沿いということもあり、往來が盛んであったことが考えられる。こうした場所ではさまざまな芸能が演じられる場にもなっており、乾武俊は「熊野もうでや西国巡礼などの遍歴宗教者が通る中世の名残りの道」として述べている(乾, 2008)^[34]。このことは、かつて説教者等がさまざまな芸能を演じた場であるこの場所に「小栗の笠懸松・照手姫の腰掛け石」が設けられたことを示唆していると考えられる。なお、「小栗判官車街道」以前の作品では照手がこの地を訪れることはない。そのため、この「史跡」は同作品が初演された1738年(元文3)以降のものと考えられる。

また、この「小栗の笠懸松・照手姫の腰掛け石」がある小栗街道を南にむかうと「明けの坂」が存在する。この坂は、平松王子までの途中の坂のことで、《おぐり判官》の餓鬼阿弥を象徴として、多くの障がいをもつ者が湯治のために湯の峰へと往來した道を、表現したものととも考えることもできよう。

おわりにかえて一生成されつづける「史跡」

このように、人形浄瑠璃をもとにした作品関連の「史跡」は、当時としては「聖地」その後「史跡」として形成されており、それぞれの地のさまざまな思惑や意図によってその地の文化が形成され、さらには信仰だけにとどまらない熊野参詣道の「聖地化」が進められ

てきたといえよう。またその流れは同道の一部が世界遺産となり、観光資源として促進され、さらに「活用」が進められている。

とくに近年では秋祭りにあたるだんじり祭りが泉州各地で行なわれるが、信太郷やその周辺地域でも盛んに行なわれている。この秋祭りに用いられるだんじり(地車)にはさまざまな彫刻(彫物)が施されており、各町の歴史等を盛り込んだ「ご当地もの」の彫刻が平成以降みられるようになってきた。信太郷でも2002年(平成14)に泉佐野市上瓦屋から購入した尾井町のだんじりは購入に先立って大修理がなされ、大屋根正面枱合には新たに「葛の葉、子別れの場」の彫物を入れた。また幸が岸和田市藤井町より1990年(平成2)に購入しただんじりには番号持ちに「安倍晴明」の彫物が入れている。そして江戸時代の信太社にあたる葛の葉稲荷神社横の葛の葉町のだんじり小屋のシャッターには《信田妻》の「恋しくば 尋ね来てみよ 和泉なる 信太の森の うらみ葛の葉」と記されている。

さらにこうした流れは信太郷だけにとどまらず、和泉市府中町に位置する市辺町は同町が小栗街道沿いにあることから2014年(平成25)に新調しただんじりの番号持ちに「小栗判官」、勾欄合に「小栗判官絵巻」の彫物が入れている。

すでに熊野参詣道沿いの「史跡」をめぐっては私自身が道成寺物との関連性を指摘しているが、このようにここでも芸能の流行が新たな「聖地」を生み、また「史跡」となって今なお形成されつづけているのである^[35]。このことはそれがたとえフィクションであろうとも、それぞれの地域のアイデンティティを醸成し、「聖地：熊野古道」を、より「聖地」たるものへ昇華させていくと考えられる。

註

- [1] 徳田和夫「説経説きと初期説経節の構造」(『国文学研究資料館紀要』2, 国文学研究資料館, 1976年), 山路興造「「さゝら」とさゝら説経」(『翁の座—芸能民たちの中世』平凡社, 1990年), 室木弥太郎『増訂 語り物(舞・説経・古浄瑠璃)の研究』(風間書房, 1992年)など。
- [2] 註1, 山路(1990)参照。西尾光一校注『撰集抄』(岩波文庫, 1970年), 紙本著色『天狗草紙』(園城寺巻, 1296年), 1294年(永仁2)の『溪嵐拾葉集』(内閣文庫本, 1294年)。
- [3] 『洛中洛外図屏風』(歴博甲本, 室町時代後期)。
- [4] 註1参照。



写真7 尾井町大屋根正面枱合「葛の葉、子別れの場」【上】

写真8 葛の葉町だんじり小屋【中】

写真9 市辺町番号持「小栗判官」【下】

[5] 最近では、村上紀夫「吉祥院天満宮の説教取締一件—一九世紀芸能者支配の一側面—」『藝能史研究』藝能史研究会, 2022年などがある。

[6] 荒木繁, 山本吉左右編『説経節』平凡社, 1973年。

[7] 註6参照。

- [8] 時宗総本山遊行寺ホームページ「小栗判官照手姫の墓」(<http://www.jishu.or.jp/yugyouji-keidai/ogurihangan-terutehime>), このホームページのほか, 遠山元浩編『特別展 遊行寺とおぐりー東海道の古刹と伝説』遊行寺宝物館, 2014年にも同様の内容が記されている。
- [9] 伝岩佐又兵衛画・御物絵巻『をぐり』(江戸時代初期, 宮内庁三の丸尚蔵館蔵)。
- [10] 文教大学小栗判官共同研究チーム編『小栗判官伝承の形成と展開 研究報告』(文教大学小栗判官共同研究チーム, 2007年)。
- [11] 「鎌倉大草紙」『新校 群書類従』16, 内外書籍, 1928年。
- [12] 平野雅道「『鎌倉大草紙』の小栗伝承」文教大学小栗判官共同研究チーム編『小栗判官伝承の形成と展開 研究報告』(文教大学小栗判官共同研究チーム, 2007年)。
- [13] 註9参照。
- [14] 註6参照。
- [15] 紙宏行「小栗略縁起類の諸本と成立 〈付〉長生院蔵「小栗小伝」「小栗略縁起」「小栗霊験記」翻刻」文教大学小栗判官共同研究チーム編『小栗判官伝承の形成と展開 研究報告』(文教大学小栗判官共同研究チーム, 2007年)。
- [16] 「小栗略縁起類」は「小栗小伝」(江戸末期写, 長生院蔵), 「小栗略縁起」(東北大学附属図書館狩野文庫蔵『名所小志叢』32ほか各所で所蔵されている), 「小栗略縁起」(長生院蔵), 「小栗判官縁起」(国立国会図書館蔵『縁起』4所収) などがあり, 紙が紹介をしている。
- [17] 註15参照。
- [18] 吉村旭輝「道成寺物の流行による道成寺と熊野参詣道の変容—『道成寺縁起』絵解き成立を視野に入れて—」『藝能史研究』224, 藝能史研究会, 2019年。
- [19] 義太夫年表近世篇刊行会編『義太夫年表』近世編 4, 八木書店, 1980年。
- [20] 「当流小栗判官」中山泰昌編『近松門左衛門集 上(近代日本文学大系)』5, 誠文堂, 1933年所収。
- [21] 註19参照。
- [22] 水谷不倒生校訂『校訂 竹田出雲浄瑠璃集』博文館, 1896年所収。
- [23] これらの「史跡」は杉中浩一郎・谷本圭司・水本雄三・西尾操編『紀南の小栗伝承(第11回小栗サミット2002「口熊野のつどい」記念誌)』第一一回小栗サミット二〇〇二「口熊野のつどい」実行委員会, 2002年でも紹介されている。
- [24] これらの「史跡」は杉中他編(2002)のほか, 安井理夫『ガイドブック小栗判官物語』私家版, 2010年などでも紹介されている。
- [25] 石本和可奈「和歌山大学紀州経済史文化史研究所蔵『車塚由来』解題」『紀州経済史文化史研究所紀要』37, 和歌山大学紀州経済史文化史研究所, 2016年。
- [26] 信太郷については和泉市史編纂委員会編『和泉市史』1(大阪府和泉市役所, 1965年), 和泉市史編纂委員会編『和泉市史』2, (大阪府和泉市役所, 1968年), また和泉市史編さん委員会編『和泉市の歴史4地域叙述編 信太山地域の歴史と生活』(和泉市, 2015年)に詳しい。
- [27] 註19参照。
- [28] 註6参照。
- [29] 《信田妻》の作品研究としては, 中村とも子「昔話「狐女房」を考える—口承が受容するものとしなないもの—」『口承文芸研究』18, 口承文芸学会, 1995年などがある。
- [30] 藤村義彰『伝説信太の森—うらみ葛の葉』(宗教文学研究会, 2000年), 藤村「暦と陰陽師—舞暦と信太陰陽師藤村家」『歴史民俗学』25, (歴史民俗学研究会, 2006年), 細田慈人「『信太暦』の発行停止と信太陰陽師藤村氏—信太暦に関する史料紹介—」『和泉市史紀要』27近世和泉の村と支配(和泉市教育委員会, 2017年)などにて論考が進められているほか, 2017年では同家が発行した信太暦などが信太の森ふるさと館で展示された。図録として信太の森の鏡池史跡公園協力会研究グループ・和泉市教育委員会編『陰陽道の世界』(信太の森の鏡池史跡公園信太の森ふるさと館, 2017年)を発行している。
- [31] 秋里籬島『和泉名所図会』柳原書店, 1976年。
- [32] 奥田家文書研究会編『奥田家文書』1, 大阪府同和事業促進協議会・大阪部落解放研究所, 1969年所収。
- [33] 「御検地基盤絵図」寛政元年(1789)(奥田家文書研究会編『奥田家文書』3, 大阪府同和事業促進協議会・大阪部落解放研究所, 1970年所収)などにも描かれていない。
- [34] 乾武俊『被差別部落の民俗伝承』私家版, 2008年。
- [35] 註18参照。